

2019年度「オリンピック・パラリンピック・ムーブメント全国展開事業」

事業実施報告書

- I スポーツ及びオリンピック、パラリンピックの意義や歴史に関する学び
- II マナーとおもてなしの心を備えたボランティアの育成
- III スポーツを通じたインクルーシブな社会（共生社会）の構築
- IV 日本の伝統、郷土の文化や世界の文化の理解、多様性を尊重する態度の育成
- V スポーツに対する興味・関心の向上、スポーツを楽しむ心の育成

道府県・政令市名【長野県】

学校名【松本市立奈川小中学校】

1 実践テーマ	I・II (III) (IV) (V) (複数選択可)
2 実施対象者 (学年・人数)	奈川小学校 全校 (20名) 小1年生 6名 2年生 1名 3年生 3名 4年生 3名 5年生 4名 6年生 3名 奈川中学校 全校 (10名) 中1年生 1名 2年生 1名 3年生 8名 奈川公民館の方 2名 地域の方 22名 地域の高校生 6名 計30名 計60名
3 展開の形式	(1) 学校における活動 (1) 教科名 (保健体育 道徳 総合的な学習の時間) (2) 行事名 (人権講演会) (3) その他 () (2) 地域における活動 (1) イベント名 (パラスポーツを楽しもう～ボッチャ体験会 ～ 奈川小中学校コミュニティスクール主催) (2) その他 ()
4 目標 (ねらい)	テーマ【パラスポーツでつながろう!!】 ・パラスポーツの体験・実践を通して、パラリンピックに興味・関心をもったり、障がいに対する理解を深め、障がいのある方や、地域に住むお年寄りの方等と交流したりし、「スポーツを通じた共生社会」の創造について考えを持ち、実践していこうとする意欲を持つ。

5 取組内容

1 「知ることから始めよう～パラスポーツ体験～」(中学校)
中学校ではI'm POSSIBLEの教材を活用したり、パラスポーツの動画を見たりして、「パラリンピックについて」「パラスポーツについて」学習をした上でシッティングバレーの体験を行った。「障がいのある人もない人も一緒に楽しめているな」「立てない分、運動能力がみんな同じくらいで、ボールを拾うのが困難」「なるべくルールを変えずにゲームをすることで、健常者と障がい者との壁をなくそうとしているのかな」等、様々な感想や疑問等が出て、「実際パラスポーツをしている人に会いたい」という思いが膨らんだ。(11月)



2 「ブラインドサッカーの体験」(小中合同)

人権講演会に、小中合同で長野県ブラインドサッカー協会会長の中沢さんに来ていただき、「つまずきながらも一歩ずつ」という題でブラインドサッカーの体験教室を開いた。中沢さんは打ち合わせで「単なる体験にせず、ブラインドサッカーを通して、『相手の身になること』の大切さを教えられれば」とおっしゃり、ゲームの前に、2人1組で、どちらか一人がアイマスクをして、ボールを運ぶゲームや、ドリブルやパスの体験の時間を多く取った。子ども達はその中で「相手の身になって考え、声を出すこと」に気付いていった。ゲームの体験の後、小学生も含めて30人でアイマスクをしたまま誕生日が早い人から並んでいく「誕生日チェーン」を行ったが、全員が「相手に身になって」声を出し、一直線に並ぶことができ、自分たちのコミュニケーションの高まりを感じることができた。感想では「体操でも簡単な動きなのに、目が見えないと、難しくて、身体が変わったようだった。見ないでボールをけるとどこかへボールがどこかへ行っちゃって、楽しいはずのサッカーもおもしろくなかった。でもみんなが思いやりを持っていたから楽しかったし、最後はみんなが思いやりを持っていたからすぐに並べたんだと思いました。思いやりを持って差別をしないことが大切だと思います。日々の生活で思いやりを持って生活したいです。」等があった。ブラインドサッカーの楽しさ、難しさの中から、子ども達はインクルーシブな社会づくりに大切なことを学ぶことができた。(11月)



3 ボディパーカッションで交流（小学校）

ブラインドサッカーの体験をし、障がいのある方やお年寄りとも同じことをして楽しむバリアフリーに関心をもった子ども達は、テレビで流れている、東京2020の公認プログラムの「パプリカ」を障がいのある子と一緒にボディパーカッションを楽しんでいるテレビ番組を視聴し、「自分たちもやりたい」と、練習し、地域の

4 車椅子バスケットボールの体験（小中合同 主に中学校）

中学校では、パラスポーツについてもっと知りたいと考え、車椅子バスケットボールのパラリンピック元代表の奥原明男さんに来校していただき、講演会と車椅子バスケットボールの体験を行った。小学生も参加した。

奥原さんの、事故に遭ってから、車椅子バスケットボールに出会い、パラリンピックに出場するまでのお話を聞き、生徒はパラスポーツが障がいのある人たちの支えや生きがいになることを学び、「スポーツが人の人生を豊かにする」ことを感じ取った。

体験では、中学生は実際に車椅子に乗って試合も行い、「奥原さんの動きやシュートを見てみると簡単そうに見えたが、まず思ったよりも車椅子の操作から上手くできず大変だった」という感想を持った。最後、奥原さんからバリアフリーについてお話があった。

後日、一人一人バリアフリーについて考え、「お互いの違いを認めていけるような社会」「違いを認め合い、尊重すること」等の意見が出た。（12月）

5 ボッチャを通しての体験・交流（小中合同）

（1）第1回ボッチャ体験会 ～小中学生による体験～

「地域と交流ができるパラスポーツを学べないか」と考え、スポーツ課よりボッチャセットをいただいた。中学生は自分たちで資料や動画等を見ながらルールを確認して行っ



た。また職員でも研修を行った。しかしながら、小中学生全員がルールを知って楽しめるようになるには、講師を招いて、体験会を行うことがよいだろうと考え、松本市の中央公民館にお願いし、講師を派遣していただき、体験会を開くことになった。地域との交流を念頭に置いて計画し、奈川地区公民館にも協力を仰ぎ、「奈川小中学校コミュニティスクール」として、2回の体験会を開くことにした。



第1回は、松本市のボッチャサポーター及び地元高校生のボランティアに、小中学生がボッチャの歴史、ルール等を教わる形で、ゲームを楽しんだ。ルールを覚えるだけでなく、審判も行い、皆、楽しそうに競技をしていた。中学校からは「ボッチャは思ったよりも奥が深いスポーツだと感じた」小学校からは「ボールをうまく転がせると高校生や中学生のお兄さんお姉さんにほめられてうれしかった」という感想が出された。(12月)

(2) 第2回ボッチャ体験会 ～地域の方との交流～

第2回は、地域の方をお呼びし、小学生(中学生は日程の都合で不参加)が地域の方にルールを教える形で行うことにし、地域に参加の呼びかけのビラを作成・配布したり、公民館からも参加の呼びかけを行ってもらったりした。



小学校では、第1回の体験会で学んだことをより確実にして地域の方にも教えられるように、自分たちで



「ボッチャリンピック」と名付けたボッチャ大会を開き、楽しみながら、一人一人ルールを確認した。

体験会当日は、ボッチャサポーターの方や地域の高校生にも助けられながら地域の方の前でデモンストレーションも行い、地域の方と対戦形式で楽しんだ。地域の方からは「ルールが分かりやすくて取り組みやすい。子ども達と体験できて元気が出た。」「面白いので続けていけそうだ」等の感想、児童からも「ルールを知ってもらえてよかった。」「地域の方が楽しんでくれてうれしかった。」等の言葉が聞かれた。春休みに公民館主催で、



ポッチャを通しての地域交流を続けていく予定である。また、奈川小中学校は、今年度初めて行われた長野県でのポッチャ競技大会「パラウェーブNAGANOカップ」県大会にオリンピック・パラリンピック教育推進校の代表として招待され、参加した。出場した児童の感想には「車椅子の方も大勢来ていました。ポッチャは身体が不自由な人でも気軽にできるのがとてもいいなと思いました。試合をしてみると、みんなと協力ができ、楽しかったです。勝ち負けじゃなく、協力し合うこと、楽しむことを味わえてよい経験となりました」とあった。



(1, 2月)

6 学習のまとめ～ガイドランナーの役割～ (中学校)

中学校では、今年度の学習のまとめとして、I'm POSSIBLEの教材を活用してパラスポーツの中での「ガイドランナー」について学習をした。ガイドランナーについて体験する中で、より相手との信頼関係をつくることや、コミュニケーションをとること、仲間と情熱をもって夢を追うことの尊さを学び、パラスポーツの多面的な価値について深く考えることができた。「パラリンピックのマラソンを見るときにはガイドランナーも注目したい」「パラリンピックに出場する選手がどのような努力をしてきたのか、また選手を支える人はどうやって支えているのか等を考えたり想像したりしながら、パラリンピックを見たい。」等の感想が出た。(1月)



6 主な成果

小中学校での実践になったが、中学生は主に多くの体験を通してパラリンピックやパラスポーツの奥深さを知り、体験を通して得た物を日常生活に生かしていくことができるように学習した。小学生は、体験の後、実際にポッチャ等で地域との交流を活発にすることができた。

児童・生徒達は、複数のパラスポーツの体験及びパラアスリートと交流することができ、パラスポーツの意義及び面白さを多面的に学ぶことができた。特に、講演に来て下さったパラアスリートの方がそれぞれ考える「子ども達に学んでほしいこと」をストレートに伝えて下さったので、ブラインドサッカーでは「コミュニケーション能力の大切さ」「相手の身になって考えることの大切さ」を、車椅子バスケットボールでは、「スポーツが生きる喜びになること」「バリアフリーについて考えること」を、児童・生徒がしっかりと学び、一人一人がパラスポーツやパラリンピックに対して思いを持つことができた。ポッチャも含め、ただ体験し、面白さを感じるだけでなく、パラスポーツそれぞれの奥深さ、パラスポーツを通して学ぶインクルーシブな社会のあり方について深く学ぶことができ、2020年のパラリンピックへの興味が

	高まったことが成果である。
7実践において工夫した点 (事業の特色)	本校がある松本市奈川地区は人口約650人の過疎化・高齢化が進む地区で、学校が地域の中心として多くの発信を行うことで、地域の方を元気づけている面がある。今回行った小学生と地域の方のボッチャ体験会のような活動は、地域の方の活力となっていくものであると考えられる。パラスポーツを通じた交流が、今後の地域づくりにつながる可能性がある。
8主な課題等	<ul style="list-style-type: none"> ・ボッチャの活動においては、地域との体験会が1月になり、中学生が受検等を控え忙しい時期となり参加できなかったため、もう少し早い時期に行う(5月~11月)。 ・体験活動・交流活動については、さらに十分な振り返りの時間を確保する。 ・小中それぞれの発達段階に合った活動をさらに考える。
9来年度以降の実施予定	<p>① 地域との交流の継続 ボッチャ等パラスポーツを通じた地域との交流会を継続させていく。来年度は中学生も関わられるようにしたい。</p> <p>② オリンピック・パラリンピックのより深い理解 <ul style="list-style-type: none"> ・パラリンピック・メッセンジャーの資格を持った方を学校に招き、より深くお話をお聴きする。 ・I'm POSSIBLE のより積極的な活用 ・オリンピック・パラリンピックにおける国際交流の意義についてもふれていく。 </p> <p>③ パラリンピックの観戦と応援 <ul style="list-style-type: none"> ・今までに学んだことを振り返りながら、パラリンピックの中継を学校で視聴し、パラアスリートを応援する。 ・学んだことをパワーポイント等にまとめ、発表する場をもつ。 </p> <p>④ パラアスリートを学校に招待し、交流する。 <ul style="list-style-type: none"> ・できれば、パラリンピックに出場したパラアスリートを学校に招待し、お話を聴いたり、交流会を開いたりする。地域の方も参加できるようにする。 </p>